朝鮮人参耕作記の歴史

安江政一

今村鞆の『人参史』全七巻の大著にも、人参国産に払われた苦心研究の記録が欠けている。それは国産の第一歩となった恒常的な人参苗の育成に成功した佐渡奉行たちの報告が埋れ、この成果に続く日光での農業的大規模栽培の耕作に関する文書が残っていないためである。演者は杏雨書屋所蔵の『尾州御薬園人参栽培一件綴』を調査した後、本書の筆者田口忠左衛門の子孫を岐阜県付知町に訪ね、同家になお多く残る人参文書を調べて、いろいろな耕作記にであい、栽培技術の進歩のあとをたどることができた。人参は一般植物と性質が著しく異っている。その特性と、そのためにおこる栽培上の困難はどのようなものか、それはどのようにして克服されたかを耕作記の中で調べた。この克服の過程が人参国産のもっとも具体的な歴史を示すものと思われる。

人参草の特殊性は次の六点である。一、種子は一斉には発芽しない。二、種子は乾くと発芽しなくなる。三、発芽第一年は三小葉からなる掌状複葉一枚、第二年は五小葉の掌状複葉一枚だけで夫々一年間を過し、この間葉に欠損を生じても再生しない。四、直射日光に弱い。五、葉も根も多種類の害虫に犯され、鼠も根を食害する。六、病気と連作に弱い。

種子が一斉に発芽しないのは野生植物の通有性であるが、「芽切り」の発見でこの点は解決された。種が乾くと発芽しなくなることは熟した果実をすぐ蒔くことで避けたが、覆土の厚さを一般作物並にすると夏の暑い間に乾いて発芽しなかった。乾かないよう深蒔すると種が腐って苗は得られなかった。人参栽培開始の事前調査報告の一項に「人参は暑さを忌み海辺の山に生ず」があって、佐渡島に野生の人参を探したこともあった。享保八年将軍吉宗が佐渡奉行に人参苗四本を渡して栽培を命じたのも右調査報告が原因と思われる。四本の人参苗は大野、栗野江、長谷の三ヵ村に分けて植えられたが、深い山峡の長谷寺境内のものだけよく生きながらえて、数年にわたって多数の実を生

じた。奉行はこの実を蒔いたが、失敗をくり返した後石台に蒔いた。石台は珍石を床の間に飾ったり、盆景を作ったりする脚付の浅い箱である。人参実の熟する六月に蒔いて翌年三月まで手元において管理したのである。これによって覆土が薄くてもよくなって苗が多数得られるようになった。困難の一つが克服された。

佐渡では露地に五粒の実を蒔いて五本の苗を得たことがあったが、越冬に際して全滅した。農業的生産には露地蒔で発芽させ、その上越冬させなくてはならない。植村左平次は二十数回、人参御用を承って日光へ赴いたが、初めの一回は人参寒養御用であった。越冬の研究と思われるが、佐渡の失敗は霜柱による当才人参根の引抜きとみて、落葉あるいは切わらでおおって解決したのであろう。寒養御用は一回だけであった。毎年一～三回日光へ出張し、十八年かけて農業的生産にこぎつけた。要点は露地蒔にして発芽させるのは覆土の厚さの加減であり、成育には日覆の向と高さの調節であったと思われるが、これらに関する記録は残っていない。

佐渡奉行所での仕事場は役所中庭の花壇であった。このため人参植場を花壇とよぶようになったと思われる。享保二十年「年々多数の人参実が得られるようになった」として奉行所地役人が表彰された後は、現状維持のほか拡張の余地はなかった。元文年間、日光でも得られるようになった人参実を学者と希望者にわけ与えたが、このときの「官府書付」の人参培養法は佐渡の箱蒔であったが、覆土の厚さを明示した。箱の土をならし、栗実大の小石を並べ、この間に三寸間隔に人参実をおいて、土を小石のかくれないようにかけよと指示した。覆土が強雨で泥状化して固まっても小石との間にすき間ができるから、苗は地上に出ることができる。佐渡奉行の考案を屋外に適用できるよう改良したものであった。

田村藍水は元文二年と寛保三年の二回人参実を与えられて、栽培をさらに研究して延享四年『朝鮮人参耕作記』を作った。これが全国的な栽培指針となった。宝暦十二年平賀源内の『人参培養法』、明和六年『増補人参耕作記』の刻が完成した。これら著作の進歩は土拵へと日覆の作り方の明示であった。以後幕府は全国的に栽培を奨励したが、天保の頃は農村へ実地指導に出かけ、有料で教授する者も

あらわれた。また農民編著の耕作記もあった。年代と耕作の進歩状況について述べる。

本研究における資料は杏雨書屋と田口慶昭氏から与えられた古文書の複写である。古文書の解読は瀬戸市村田秀雄先生の御指導によった。以上に対して厚く御礼申し上げる。

（新潟薬科大学名誉教授）

『福田方』の小児諸病證論について

広田曄子

『福田方』は壺隠庵有隣によって貞治二年（一三六三）頃に著わされた医学全書である。『医心方』、『万安方』に比べると非常に短い書物であるが、室町時代の代表的医学全書として重要な位置を占めている。

演者は日本の小児科領域の歴史について調べてきたので、ここでも『福田方』の小児諸病証論をとりあげてその歴史的位置づけを行いたい。なお、『福田方』は日本古典全集本を用いた。

『福田方』はかなまじり文で書かれているのが大きな特徴といえる。それより前に著わされた『医心方』、『万安方』は漢文である。『頓医抄』はかなまじり文なので、これに次ぐものといえる。

『医心方』や『万安方』のようにほとんどの文の出典が